

## 1 学校教育目標

○進んで学ぶ人 ○礼儀正しい人 ○やりとげる人

## 2 めざす学校像、児童・生徒像、教師像

○学校像	○生徒一人一人の資質と能力を伸ばす学校 ○教師が常に指導力の向上を目指す学校 ○生徒・保護者・地域から信頼される学校
○児童・生徒像	○自ら学ぼうとする意欲があり、自尊感情と自己肯定感の高い生徒 ○礼儀正しく、他者には優しく自分には厳しい生徒 ○努力と挑戦を重ね、粘り強く学ぶ生徒 ○自ら考え判断し行動できる生徒
○教師像	○教育公務員として使命を自覚し、その職責を果たすことのできる教師 ○常に自己の指導力の向上と生徒理解に努め、研鑽に励む教師 ○教育への情熱と生徒への深い愛情があり、豊かな人間性を身に付けた教師

## 3 学校の現状及び前年度の成果と課題

### 【学校の現状及び成果】

- ① 全体的に教職員の指導のもと、落ち着いた環境の中で教育活動が展開されている。
- ② 大規模校の特質や部活動での強みを生かした特色ある運動会、文化祭、合唱コンクールなどの行事を通して、生徒たちは達成感や連帯感をもつことができ、保護者や地域からも高い評価を得ている。(昨年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、中止、延期、又は、制限を設けての実施)
- ③ 全体的に部活動に生徒、教師が熱心に取り組み、全国大会、関東大会、都大会など、優秀な成績を収めている。

### 【課題】

- ① 生徒の学力に二極化が見られる。学力の定着や学習意欲の向上を図るため、学力調査等の結果・分析に基づき、教師の授業改善や授業外における学習の取組の充実を図る必要がある。
- ② 知識・技能の着実な習得を図るとともに、単元全体をとおして、思考力・判断力・表現力、問題解決能力の育成を図るため、アクティブラーニング(主体的・対話的で深い学び)の視点から、足立スタンダードに基づく授業改善により一層取り組む必要がある。
- ③ 年間30日以上欠席する不登校生徒の割合は、依然として、全国平均より高い状況にあり、校内の不登校対策委員会を中心に、学校全体で組織的に取り組むとともに、養護教諭、スクールカウンセラー、教育相談コーディネータ、登校サポーター、SSW、関係機関等との連携の一層の充実を図る。また、いじめの未然防止、早期発見、早期解決に向けて、いじめ防止対策委員会を定期的に実施する。

## 4 重点的な取組事項

	内 容	実施期間(年度) R:令和
--	-----	---------------

		R2	R3	R4	R5	R6
1	学力向上アクションプラン	○	○	○	○	○
2	教師の授業力の向上と小中連携教育の充実及び教育課題への対応	○	○	○	○	○
3	いじめや不登校の防止に向けた組織的な状況把握と対応	○	○	○	○	○

## 5 令和4年度の重点目標

重点的な取組事項－1		確かな学力の定着・向上を目指す学習指導の充実(学力向上アクションプラン)							
A 今年度の成果目標		達成基準 (目標通過率)	実施結果 (通過率結果)	コメント・課題	達成度 ◎○△●				
授業及び授業外の実践を通じた つまずきの解消と学力の向上		66% (区学力調査平均通過率) 62% (到達度テスト平均正答率)	70.2% (区学力調査平均通過率)	1年英語以外区、全国の通過率を上回った。 1年の英語が課題である。	◎				
B 目標実現に向けた取組み									
新・ 継	アクション プラン	対象・ 実施教科	頻度・ 実施時期	具体的な取り組み内容 (誰が、何を、どのように)	達成確認 方法	達成目標 (=数値) (いつ・何を・どの程度)	実施結 果	コメント・課題	達成度◎○△ ●
1 継続	朝学習の実施	全生徒 国語・数学・ 英語・理科・ 社会	週5回(全体集 会日及び学習コ ンテスト期間等 は除く)	【指導体制】担任 【取組のねらい・目的】 基礎学力向上のため、毎朝学 習内容の復習・確認を行う。 【使用教材】AIドリル、教科 担任作成ドリル等	2月に学力 到達度テスト実施	到達度テスト 平均正答率 62%以上	3月に 実施予 定	年間を通してAIドリルを曜日で教科を振り分け実施した。課題のある生徒も取り組んでいた。	◎

2 継続	学習 コンテスト	全生徒 国語・数学・ 英語	年3回実施	【指導体制】担任 【取組のねらい・目的】各クラスで合格点に向けて取り組むことにより、自信を育むとともに、基礎学力の向上を図る。 【使用教材】 教科担任作成プリント等	毎回各教科 1回ずつコン テストを 実施	国語・数学コン テスト全体平均 90%以上 英語コンテスト 全体平均85% 以上	達成目 標を超 えど きた。	各学年単位 で合格を 目指し、意 欲的に取 り組んだ。1年 英語に二極 化が見られ る。	◎
3 継続	補充教室 の実施	全学年 国語・数学・ 英語	毎週2回 授業終了後	【指導体制】担任+副担任 【取組のねらい・目的】 全体及び指名形式で、演習を中心 に、つまずきの解消を図る。 【使用教材】市販ドリル、教科 担任作成ドリル、A Iドリル等	2月に学力 到達度テス ト実施	到達度テスト 平均正答率 62%以上	3月に 実施次 第記入	一斉及び課 題のある生 徒を対象に 実施した。	◎
4 継続	数学特訓 教室の実施	1年生生徒 (区学力調 査数学正答 率60%以 下の生徒) 数学	夏季休業中 7回程度	【指導体制】数学科教員 【取組のねらい・目的】学習の つまずき箇所を確認しながら、 小学校の算数の学習内容の定 着を図り、中学校の正負の数の 四則計算の定着に努める。 【使用教材】区教委プリント等	数学特訓教 室終了後に テストを実 施	数学特訓教室 実施前より、 平均20%UP	終了直 後のテ ストで は結果 を残せ た。	時間経過に より定着が 確実でなく なる結果と なった。今 後も継続す る必要あり	○
5 継続	サマースク ールの実施	全希望生徒 国語・数学・ 英語・理科・ 社会	夏季休業中 7回程度	【指導体制】 全教員+学習ボランティア 【取組のねらい・目的】 当該年度の前半期の内容につ いて学習のつまずきを図る。 【使用教材】市販ドリル、教科 担任作成ドリル、A Iドリル等	2月に学力 到達度テス ト実施	到達度テスト 平均正答率 62%以上	3月に 実施次 第記入	全学年5教 科で実施し た。参加生 徒は意欲的 に参加し た。次年度 は指名制と 希望制を併 用する。	○

6 継続	各種検定の 実施	全希望生徒 国語・数学・ 英語	各検定年3回 英語検定 数学検定 漢字検定	【指導体制】各教科担任 【取組のねらい・目的】生徒一人ひとりのそれぞれの目標に向かって、努力させることにより、学習意欲を高め、学力の向上に努める。 【使用教材】検定対策本	6月、7月、 8月、10月、 1月、2月の実施 時期に確認	各種検定を 各教科年3回実 施	予定ど おり、各教 科年3回 実施し た。	全体保護者 会などでも 説明し、計 画的に実施 できた。	◎
7 継続	質問教室の 実施	全希望生徒 全教科	定期考査実施 一週間前 放課後	【指導体制】各教科担任 【取組のねらい・目的】生徒一人ひとりのつまずいている内容の解消を図り、学力の向上に努める。	6月、9月、 11月、2月 の実施時 期に確認	質問教室を 年間放課後 のべ20日実施	定期考 査前予 定どお り実施 した。	意欲的に放 課後の時間 に、各教科 担当に個別 指導を希望 する生徒が 増えた。	◎
8 継続	学力向上委 員会の設置	管理職 学習進路指 導部 3名	年3回程度実施	【構成】管理職＋進路学習部 各学年1名 【取組みのねらい・目的】定期的 に、アクションプランの実施 状況について確認を行うとと もに、内容・方法の改善を図る	実施回数	年3回程度実施	随時実 施した	進路学習主 任を中心 に実施内容 について確 認できた。	○
9 新規	家庭学習ノ ートの取組	全学年 3年生は、夏 季休業期間 前まで実施	年間を通して	【指導体制】各担任（副担任） 【取組のねらい・目的】毎日、 少しずつ、家庭学習に主体的 に取り組む習慣を形成する。	定着してい る生徒の割 合	ほぼ毎日ノ ートを提 出する生 徒の割合 が、30% 以上	40%程 度が提 出でき た。	提出する生 徒が決ま ってきて いる。今 後はA I ドリル との連携 を進める。	○
10 継続	I C T を 活用した授 業研究	全学年・全 教科	年2回程度実施	【構成】学習進路部で運営。 【取組みのねらい・目的】 年2回、タブレット等I C T を活用した授業について研修 会を行う。	実施回数	年2回程度実施	授業観 察での 実施が できた	研究授業 や研修会 という形 はとれな かったが 、使用者 は確実に 増やせた。	△

重点的な取組事項－2		教師の授業力の向上と小中連携教育の充実及び教育課題への対応			
A 今年度の成果目標	達成基準	実施結果	コメント・課題	達成度	
主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善及び小中9年間を見通した授業改善の工夫	年間にわたり、小中連携合同研修会を7回以上実施するとともに、区学力調査の意識調査で学習に関する質問項目について平均を超える。	計画的に全体会から全7回を実施することができた。意識調査では平均を超えた。	小中ともに表現活動に重点を置き授業を展開することで協議会での研究を深められた。	◎	
B 目標実現に向けた取組み					
項目	達成基準	具体的な方策	実施結果	コメント・課題	達成度
アクティブラーニングの視点から授業改善を図る。	学校生活アンケートの関連項目について、前年度よりも1～2%ポイントを上げる。	自己申告時に、足立スタンダードの視点を取り入れた授業改善について記述させるとともに、継続的な授業観察を通して、個別に指導する。	教員一人年3回の授業観察時の授業スタイルの指導及び継続的な授業観察により、生徒アンケート結果「めあて・振り返り」の実施が97%となった。	教員の意識が向上し、ほぼ全ての授業でめあての設定が行えている。課題としてその精度を向上させることとまとめの徹底である。	○
小中連携を通して、主体的・対話的で深い学びの視点に立った授業改善を図る。	全体会や小中の授業公開、講演会等を含め、年7回小中連携の取組を実施する。	小中一貫教育の視点や主体的・対話的で深い学びの視点に立った授業改善について、年間を通じ7回研修を行う。	主体的・対話的な授業展開と表現力に視点を当てることを教員から提案し連携を進められた。全体会から授業研究、講演会と7回実施できた。	小中の学びのスタイルを揃えること、表現力の育成に着目した連携となった。授業を中心に連携していく。	◎
6年生を対象に体験授業を行う	5つの小学校の6年生を対象に、9教科全科で開設し、より多くの講座で実施する。	キャリア教育の視点から、近隣の小学校6年生を対象に、中学入学への不安の解消と学習への興味関心を高める。	近隣小学校5校から小学6年生児童を招き、授業を実施できた。	小学校の協力もあり実施できたが、次年度は発展的に授業研究を中心に進めるため解消する。	◎
授業や評価・評定の方法について、情報を共有し、よりよい在り方を検討する。	年間を通して、西新井北ブロック内の教員間で情報交換をしたり、授業を公開したりする。	区中研のブロック研修会等を通して、授業を公開し、授業力の改善につなげるとともに、情報交換を通して他校の実践を共有する。	指導と評価の一体化も定着しており、小中連携の中でも協議することができた。	西新井北ブロックの中では検討できなかったが区中研の中では評価方法について精度が上がっていると考える。	○

重点的な取組事項－3		いじめ及び不登校の問題解決に向けた組織的な状況把握と対応			
A 今年度の成果目標	達成基準	実施結果	コメント・課題	達成度	

いじめアンケートやQU調査等を活用した組織的な状況把握と適切な対応並びに校内委員会の定期的な実施	解消率100%, 不登校率4.5%以内	発生事例について個々に指導し、その都度解消できた。不登校は4%台の出現率であった。	週一回の教育相談部会を通年で実施し各学年の状況を共有できた。	○
--	---------------------	---	--------------------------------	---

## B 目標実現に向けた取組み

項目	達成基準	具体的な方策	実施結果	コメント・課題	達成度
いじめアンケートやWEBQUの実施並びにいじめ防止委員会の定期的な実施	いじめアンケート年3回以上、WEBQU調査年2回、いじめ防止委員会週1回の実施	いじめアンケートやWEBQU調査で客観的に生徒の状況を把握するとともに、いじめ防止委員会や学年会等を通して、情報共有、解決を図る。	WebQUの調査と結果や年3回のいじめアンケート調査の結果より面談を実施し、いじめへの初期対応を実施した。生活指導部会による共有を図り早期発見、早期解決できた。	いじめ対応は初期対応から生活指導部を中心に実施できた。WEBQU調査年2回実施したが検査結果を更に生かしていく必要があった。	○
サポートルームの定期的な開設	サポートルームの定期的な開設 週3回程度	不登校生徒対象に定期的にサポートルームを開設し、生徒に応じた学習を支援する	毎回1～4名程度の生徒の参加があった。行事の参観や避難訓練への参加など参加日数を増やすことができた。	生徒理解を深めるため、SC、生活指導員と担任、学年との連携を更に推進していく。	○
教育相談コーディネータ、養護教諭、SC、SSW等との連携の充実	週1回校内委員会を実施し、状況把握や手立ての確認を行い、不登校率4.5%以内を目指す。	管理職、教育相談コーディネータ、各学年の教員、養護教諭、SC、SSWがチームとなって、状況把握と具体的な手立てを毎週1回確認する	教育相談担当とSC、SSW、養護教諭との連携を図りながら、週1回校内委員会で状況把握や具体的な手立て今後の方向性の確認を行うことができた。	定期的な校内委員会の実施を通して組織的な対応ができたが、継続的な対応が必要な生徒がまだ存在している。	◎
コミュニケーションの教室レインボーの円滑な実施	校内委員会で状況把握や手立ての確認をし、学校全体で課題を共有する。	管理職、巡回指導教員、コーディネータ、専門員、各学年の担当者がチームとなって、週1回の校内委員会を行う。	定期的な校内委員会を通して、情報共有や手立ての確認を行い年間3回の授業観察も実施できた。	小学校との連携と教室内の活動の生徒を更に高めていくことが課題である。	○

## 6 まとめ

### (1) 今年度の成果と次年度に向けた課題及び解決の方向性

○学校行事や学年行事の復興を掲げ開催できていなかった運動会や文化祭等、感染予防対策を図りながら実施できた。生徒は落ち着いて学校生活を送りながら、入学後初めての行事に懸命に取り組み教員が常に生徒を見守り、できる限りのことを実施成長させることができています。

○授業においては足立SD授業実践が定着してきている。課題からめあてを引き出す授業も実践できつつある。生徒アンケートよりめあての提示が学校全体で97%であった。自己申告面接時の授業観察は全教員年3回学習指導案を提出しての実践ができた。

△課題としてめあての提示の仕方と発問の工夫を図り、双方の精度を高めることと、まとめから生徒自身の振り返りへと徹底することである。

△授業の内容を確実に定着させるために、家庭学習へと結び付け放課後補充学習と関連させながら、更なる学力の定着と向上である。

□今後の方向性としては、行事の実施時期の見直しや開催方法の工夫など変化していく時期と捉え検討し、改善を進めていく。

□生徒主体の授業展開の精度を更に高め、主体的な学びを構築しながら、A Iドリルやグーグルホームなどを活用し学校の学びと家庭での学びを結び付け家庭学習力を向上させていく。

(2) 保護者や地域へのメッセージ

○保護者の皆様にはコロナ禍であっても、少しずつ授業や行事を公開することが出来るようになってきています。来年度は更に公開できる期間や行事を見学できる時を増やす予定をしています。感染対策を取りながらの学校生活への肯定的意見が94.0%（学校全体）と多いことが期待の表れと考え更に学校での教育を充実させていきます。

(3) その他（学校教育活動全般について）

○今後も感染症対策を実施ながらも、生徒が自ら考え、判断し、行動できる能力の育成を基本として心身の成長できる学校へと発展させていく覚悟です。